

地域力循環型キャリア教育プログラム（CLCP）に関する実践報告

—私たちは、地域や企業にどんな夢を与えられるのか—

A Practical Report of Career Cearning in Local - power Circulation (CLCP)
— What Kind of Dreams Can We Give the Neighbors and the Companies. —

有山篤利・柴田雅美⁽¹⁾・富川拓・富章⁽²⁾・宮内雄飛⁽³⁾・松本英和⁽⁴⁾

Ariyama Atsutoshi, Shibata Masami, Tomikawa Taku, Tomi Akira, Miyauchi Yui, Matsumoto Hidekazu

要 約

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラムの委託を受けスタートした「NPO・地元企業と連携した地域力循環型キャリア教育プログラム」は、近江商人・三方よしの精神を背景に、地域を舞台に「価値を消費する人から価値を生産できる人へのメタモルフォーゼ」を促すキャリア形成プログラムを中核に組み立てられている。学習にあたっては、学生のキャリア形成を「自己のための能力開発に終始することなく、地域の活性化に貢献することによって得られる社会からの期待や感謝を感受することによって達成される」ものと位置付け、学習者の成長と地域の充実が双方向に高まるリアリティ体感型の学びを展開している。またプログラムの実施にあたっては指導と支援の内容を整理しつつ、地域というキーワードを踏まえながらワークキャリアという視点を含んだ統括的なライフキャリアの醸成を図っている。

Key Words：キャリア教育，CLCP，地域活性化，人材育成，大学教育・学生支援推進事業

1 はじめに

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラムに、本学の「NPO・地元企業と連携した地域力循環型キャリア教育プログラム（以下、CLCP と略す）」が採択された。本事業は、文部科学省の委託事業であり、私立大学を中心に就職支援など、総合的な学生支援の取組みを推進するため、達成目標を明確にした教育力向上の取組みに対し2～3年間の重点的な財政的支援が行われたが（2009，文部科学省），2011年度末をもって3年間の実践に区切りがつこうとしている。

本学は建学の精神を「社会奉仕と地域貢献」におき、「人間に対する理解を深め、地域社会に貢献できる人材の育成」を教育理念として、地域から愛され、地域に貢献できる大学づくりを目指している。CLCP はまさにその文脈を背景にもつキャリア教育プログラムとして構想され、地元 NPO 法人や中小企業との協働関係を築き、その地域ネットワークの中で若者が育ち地域に根付くことがねらいとなっている。本事業は、平成23年度をもって終了するが、その区切りを迎えるにあたって、これまでの CLCP の実践とそのバックボーンとなる理論について報告しておきたいと考える。

(1) NPO法人Links代表 (2) 聖泉大学進路支援課 (3) 立命館大学理工学部2回生 (4) 立命館大学情報班工学部卒業生

2 CLCP の準備段階の取組み

2-1 初年度の位置付けと取り組み内容

初年度については、地域性の高い小規模大学であるという特徴を十分に生かしたプログラムの展開を念頭におきながら、次年度に CLCP を本格実施するための情報収集、実施体制や内容の検討、プログラムの試行期間と位置付けた。

はじめに取り組んだ内容は、CLC ネットワークという概念の創出である。これは、CLCP が大学内で閉じることなく広く地域と結びつけた学びを創造するための仕掛けであり、実際に学びを展開する舞台でもある。同時に、活動成果を報告する対象であるとともに、取組みを評価する母体として、以下の①～⑤のような役割を担う個人や団体の集合体である。

- ①キャリア教育の教材となる企業や市民活動の課題を提供する。
- ②キャリア教育に講師などの人材を派遣する。
- ③実習や研修会参加など学生に学習の場を提供する。
- ④ CLCP に関する広報に協力をする。
- ⑤ CLCP の総括や事業評価に参加する。

CLC ネットワークは年に一度の総会を開き事業報告と評価を行うが、メンバーは固定されたものではなく、平たくいえば、取組みの趣旨に賛同し協働して取組みを推進する CLCP のステークホルダーの集まりという性格をもつネットワークである。

初年度のプログラムとしては、表 1 のような内容を試行として実施するとともに、CLC ネットワークを構築するなかで 2 年目以降の在り方について情報や意見の収集を行い、初年度のプログラムの状況と比較検討することによって次年度への改善案をまとめることとした。

表 1 初年度に実施・計画したプログラム

学年	プログラム名	実施時間	ねらい	概略
1年生	キャリア形成入門	キャリアデザイン B	基礎力の育成	社会や会社の仕組みを理解するため、社会人との対話能力の育成をねらいとした外部講師による講義を実施する。
2年生	社会人対談形式のリレー講義	キャリアデザイン D	応用力の育成	地域の人材を講師がコーディネーター及びファシリテーターとなり、各々が抱える課題や悩みを題材にしたディスカッションを実施する。
2・3年生	地域インターンシップ	インターンシップ A	実践力の育成	1年生で培った力をもとに、学生のニーズに合わせた地元企業や団体でのインターンシップを実施する。
3年生	お題解決プログラム	未実施（計画のみ）	課題解決力の育成	グループで地元企業や商店の抱える様々な課題の解決に挑戦し、プレゼン大会を行う。
3年生	業界人フォーラム	キャリアアップ演習 キャリアガイダンス	就職活動への支援	広く各界で活躍する人材を講師に招き、人生観や社会観の醸成を図るとともに、学生の就職活動に対する就業意識の向上や就職活動に役立つ知識の習得などを目的にミニフォーラムを実施する。

2-2 CLC ネットワークから得た示唆と次年度に向けた構想

CLC ネットワークを構築するため、地域の NPO 法人や経済団体と意見交換を行うなかで、今後の展開に示唆を与える指摘が二つなされた。1 つは NPO 法人「三方よし研究所（彦根市）」の専務理事・岩根順子氏から教示いただいた滋賀に古くから伝わる商道德「三方よしの精神」であり、いま 1 つは滋賀県中小企業家同友会の代表理事・蔭山孝夫氏からの「県内の総合大学の出身者の多くが滋賀に根付くことはない。貴学の卒業生にこそ、滋賀県の発展に寄与する可能性を見出している」という趣旨の指摘であった。

この 2 つの指摘は、ゼネラルな大学では担い得ないローカルな大学の存在意義の核心をつくものであり、地域への人材提供とその経済・文化発展の関係性を踏まえた大学の責務に対して自覚を促すものとなった。それは、①就職活動のためのテクニック向上と明確に区別された人材育成としての学び、②若者が魅力を感じ活躍できる地域育成への参画としての学び、という 2 つの視点において、初年度試行的に実施したプログラムを振り返り、内省を促すこととなった。その結果、2 年目以降に実施するプログラムの構想に関して、キャリア教育における指導と支援を整理することによって、「三方よしの精神」をベースにした実践重視型の学習プログラムを展開するという CLCP の全体像を描くことができた。

3 CLCP のフレームワークの構築

3-1 CLCP の理論的基盤

キャリアという言葉については、D・スーパーによる「人生における主要な役割の連鎖」という捉え方が提唱されて以来、生き方の全体をさす「ライフキャリア」と、職業人生をさす「ワークキャリア」という捉え方がなされるようになった（梅澤，2007）。しかし本来、両者は矛盾するべきものではなく統合されるべきものであり（菊池，2008）、「今後の学校におけるキャリア教育，職業教育の在り方について」（中央教育審議会答申，2011）においても『人は、このような自分の役割を果たして活動すること，つまり「働くこと」を通して，人や社会にかかわることになり，そのかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである』と述べられている。

しかし、河崎（2011）が指摘するように、残念なことに現在のキャリア教育実践やキャリア支援の多くは、未だライフキャリアを支援する視点は希薄と言わざるを得ず、ライフキャリアに関する能力や態度についての統一的理解も得られていないのが現状である。

そこで、CLCP を展開するにあたっては、地域というキーワードを踏まえながらワークキャリアという視点を含んだ統括的なライフキャリアの醸成を図るために、地元滋賀に古くから受け継がれる「三方よしの精神」を援用した学習プログラムの実施に取り組んだ。プログラム開発にあたっては、『売り手と買い手が商取引において相互福利的な関係を築きつづけることによって、地域が活性化することでさらに商取引が活性化していく』という三方よしのコンセプトを援用し、連携する大学と地元 NPO 法人・企業に win-win の関係が成立することを教材化の条件とする

双方向型のプログラムを展開することとした。学生のキャリア発達という学習効果は、それぞれの団体の産学連携による事業効果と表裏一体になるよう配慮されている。

また、大学と連携する NPO 法人や企業が相互福利的に win-win な関係を構築するためには、互いの利が対立することのないよう双方が是とする共通のアイストップを描くことが重要である。それが「三方よしの精神」の帰結点たる地域の活性化であろう。したがって、CLCP で展開される活動はすべて地域を賦活するものであり、連携する大学と地元 NPO 法人・企業はともに、地域の活性化に向けた協働的關係を築かねばならない。学習の教材は多彩であるが、すべて滋賀県や湖東エリアの活性化を指向するという点が共通しており、端的に言えば、本プログラムで行われる学習は「地域を元気づける活動」がキャリア発達の教材となっている。学生の学びのために地域の活性化を利用するのではなく、地域の活性化のために学生の学びを活かしていこうという趣旨が貫かれている。

この双方向・協働型というベクトルを共有できる団体・個人が連携するパートナーであり、それらを体現する活動が CLCP における学びとなる。CLCP においては、学生のキャリア形成は「自己のための能力開発に終始することなく、地域の活性化に貢献することによって得られる社会からの期待や感謝を感受することによって達成される」ものと位置付け、学生の成長と地域の充実が双方向に高まる学習プログラムの展開に留意することとなった。

3-2 オーバーワークの原則と CLCP におけるキャリア発達モデル

渡部（2005）は、キャリア発達というものは、人が個人と社会との相互作用の中に生き続ける存在であるが故に、自律的に生きかつ社会的に自己を開いて社会に貢献していく権利と責任を負うという人間観を前提とし、その権利と責任を果たすために必要な能力と態度は生涯にわたって発達するというのがキャリア発達の背景にある、と述べている。

社会に貢献する権利と責任を果たすとは如何なることであるか。CLCP ではこれを労働のオーバーワークの原則として理解している。S (salary)：自分の給料，V (value)：自分が創り出したサービスや生産物などの価値，P (profit)：会社の利益，C (cost)：経費，最も大きいのが人件費(仲間の給料)，T (tax)：税金とするならば，自分の給料は $S = V - P - C - T$ となる。自分に支給される給料は，自ら

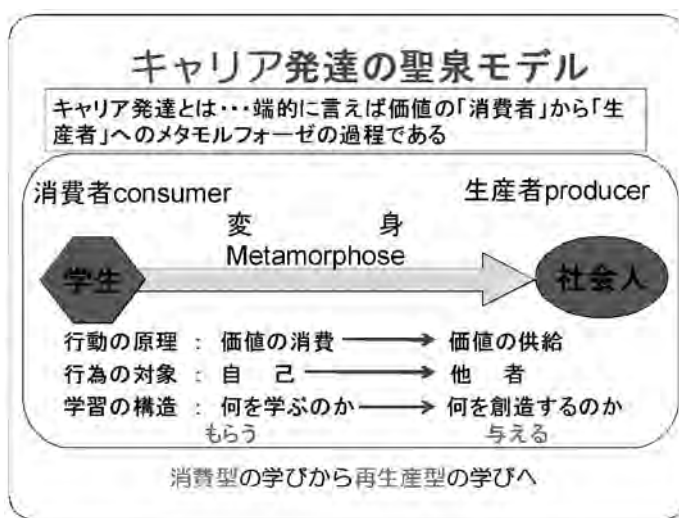


図1 キャリア発達の聖泉モデル

の労働によって創り出した価値から、会社の利益と仲間の給料と税金を差し引いた残りが報酬として付与される。また、同時にこの式は、 $V = S + P + C + T$ とあらわすこともできる。つまり、自らの利を創り出すこと以外に会社と仲間と国民の利すなわち幸福を創り出す行為が労働である。労働は常に他者のためにオーバーワークを要求する。仕事を通した社会的自立に迫るためには、自らの利以上に他者へ利を付与する姿勢が要求されることを、我々は理解せねばならない。

「働くこと」とは、広くとらえれば、人が果たす多様な役割の中で、「自分の力を発揮して社会に貢献することである（2011，中央教育審議会）。「働くこと」が社会への貢献を生み出す行為であるならば、我々には自分のための報酬や成果物を超える価値を他者の為に生み出す権利と責任が義務付けられている。働くとは、端的に言えば、常にオーバーワークの原則に貫かれた価値を生産する行為なのである。

しかし、石田（2010）が指摘するように、現在のキャリア教育では、正社員としての就職、なりたい自分・職業探しに陥り、仕事の本質が何であり、社会に自分が必要とされ続ける仕事を創造する意味や意義が指導されることはあまりない。現在行われている多くのキャリア教育プログラムは、自己実現という名のもとに自らの夢をかなえるためのキャリア形成、具体的には正社員になるための知識やスキルをいかに獲得するかが学習の命題となっている。学びのベクトルは常に自分に向けられたまま社会に向くことはなく、夢がかない正社員になった後、どう仕事を通して生きていくのかという極めて本質的な命題には迫ることがない。学生はあくまでも価値を付与される側すなわち消費者であり、「働くこと」の本質である「価値の生産者」としての自覚を促す視点は希薄である。内田（2011）は、若者の労働に対するモチベーションの低さについて、労働の本質に「オーバーアチーブ」性があることを指摘し、自らの為だけに動機づけられたキャリア教育の現状に警鐘を鳴らしているが、それはまさにこのオーバーワークの原則を無視したキャリア形成が常態化していることに対する危惧であろう。

これらの検討を踏まえ、CLCPにおけるキャリア発達とは「価値を消費する人から価値を生産できる人へのメタモルフォーゼ」として位置付け、キャリア形成を促すプログラムにおいては「自己を利する＝自己のキャリア形成」を学習の直接のねらいにおかず、「他者を利する＝地域を活性化すること」に焦点化させたプログラムを実施することとした（図1）。CLCPでは従来のキャリア教育のように、学生のキャリア発達を自らの利の範疇においた能力開発や将来像の確定の延長上に描くことはない。あくまでも、学生のキャリア成達は、地域における諸活動に貢献することで得られる周囲からの期待や感謝と引き換えに得られる教育効果として位置づけられている。学びのベクトルが、常に自らに向けられるのではなく他者に向けられる点が、他のキャリア教育プログラムと比較したCLCPの最も大きな特徴と言える。

3-3 キャリア教育における選択と集中

石田（2010）は、大学において実施されているキャリア教育の主な内容として、①低学年からのキャリア形成に関する授業、②インターンシップ、③就職ガイダンス、④資格取得等の講座

の4つをあげている。また、梅澤（2007）はこれまでのキャリア教育担当部局の仕事として、①就職事情の概況、②就職活動のもっていき方、③求人側が求職者側に期待すること、④業界研究、⑤企業研究、⑥自己確認、⑦新聞の読み方、⑧SPI、⑨エントリーシートや履歴書の書き方、⑩プレゼンテーションの仕方という10種の内容を列挙している。しかし、これらのなかには職業に直結する就職支援と



図2 CLCPにおける選択と集中

いう側面と生き方に関係づくキャリア形成支援が混在しているにもかかわらず、実際に学びが展開される際には、同一の担当者が両者を明確に区別せずに行ってきた傾向があり、そのことがワークキャリアとライフキャリアの関係性を不明瞭なものにしていた。

しかし、キャリア教育を論ずる場合、ライフキャリアとして人生における役割の連続を方向づける学びとともに、一方で各個人がそれぞれ望む職業への接続を円滑にする学びを無視することはできない。CLCPを展開する際にも、地域というキーワードを踏まえながらワークキャリアという視点を含んだ統括的なライフキャリアの醸成を図ることが必要であり、実際に就職しようとする若者のエンプロイアビリティ（就業可能性）の具体的な育成についても十分な配慮が必要である。

そこで、CLCPにおいては「個々の学生を対象とし、選択しようとする職業への接続をサポートする」学びを就職活動に向けた「支援」と位置付け、主として進路支援課による課外のガイダンス等を通じて行うこととした。一方、「学生全体を対象とし、社会人としての共通基盤となる能力や姿勢を育成する」学びについては、キャリア形成に向けた「指導」と位置付けることとした。社会的に自立した学生を「指導（キャリア教育科目）」で育成し、それを受けて、学生が職業的に自立できるように「支援（進路ガイダンス等）」をとおしてサポートするシステムをカリキュラムとして再編した（図2）。いわばキャリア教育における選択と集中である。これによって「指導」と「支援」それぞれの役割と目的を明確にしたキャリア教育を展開し、これまで両者が混在したまま一括してキャリア教育と称して実施されてきた内容の整理を試みた。

3-4 聖泉式ミルフィーユ型学習

CLCPは地域活性化という基盤に立ち、学生の学びと地元NPO法人や企業の発展を融合させていくプログラムであり、必然的に、学習活動の場を実際の市民活動や経済活動に求めるリアリティ体感型の学習プログラムとなった。

近年、「コミュニケーション能力」や「協調性」、「主体性」などの社会的能力が、学生に期待される力として盛んに取り上げられている。経済産業省（2007）は、これらを社会人基礎力として、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力とそれらを細分化した12の能力要素にまとめて提示している。これらは、現在の学生に必要な能力を、社会状況に合わせて分析的に把握したものであり、キャリア教育を実施するにあたって学生に育成すべき能力として重要な視点ではあるが、この能力が実際の社会の動態なかで必要とされ、また、発揮されている力そのものではない。学生の中に独立した力として、何某かの能力が存在するわけではなく、同時にそれが個々につながりのない力として社会の中で発揮されることもない。例えば、「協調性」の伴わない「主体性」ほど迷惑なものではなく、「主体性」が欠落したままの「コミュニケーション能力」など単なる空疎なテクニックでしかないのである。

したがって、CLCPでは、学生に必要な力を分析的に把握する重要性は踏まえながらも、大学の教室など閉じた空間のなかで、いずれかの力を選択的に伸ばすことを目的とせず、あくまでも、リアルな社会の動態のなかで発揮する「総体としての力」を養うことをねらいに学習を展開していくこととした。

学習は地域における実践や活動がメインとなるが、概念理解の深化を図るための学内での授業がセットとなり、知識の習得とその再生産としての実践が往復するなかで学びが深化していく。また、学習のまとめにはそれらを統合する学びとして象徴的イベントが設定され、学習者の視線はこのイベントに向けて収斂されていくこととなる。CLCPでは、このように理論と実践の層を積み重ねて学びを深める学習スタイルを、パイ生地が重なるケーキのミルフィーユになぞらえ、「聖泉式ミルフィーユ型学習」と名付けプログラムを実施している。

3-5 CLCPの推進組織

CLCPを推進するにあたっては、主担当教員、指導補助にあたる副担当教員、主に地域との連携を担う地域コーディネーター、取組みの推進を支援する進路支援課職員等によるチームを構成している。図3ではその組織を三角錐の模式図であらわしている。

特に、地域コーディネーターは地元の活性化に取り組むNPO法人代表にお願いし、そ

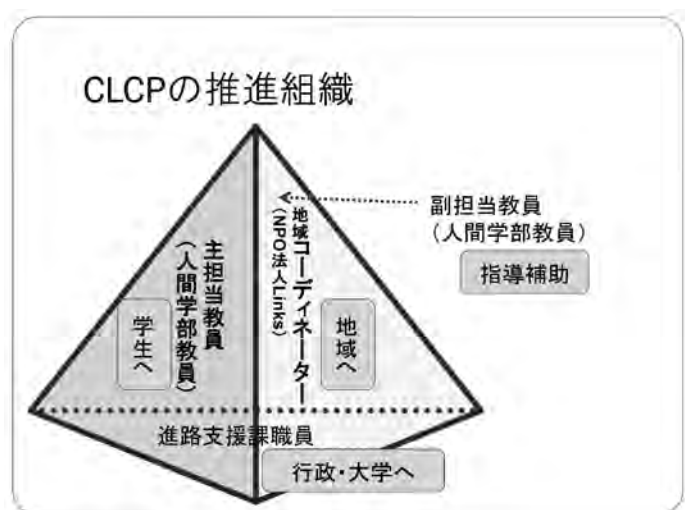


図3 CLCPの推進組織

の任にあたっているが、CLCPのように地域に入り込んだ実質的な連携を模索するためには必須のポジションと言える。CLCPの成功の鍵は、地元と大学を結ぶキーマンとしての地域人材の活用が担っていると言っても過言ではない。

4 CLCPの2年間の実践

4-1 プログラムの構造と学習の系統性

CLCPは1年間の準備・試行期間を経て、平成22年度より本格的に実施されたが、その組み立ての基本構造は、図4に示すとおりである。3年間を通した共通の学習テーマとして、「私達は地域や企業にどのような夢を与えられるのか」という命題が設定されており、1年生「市民のロールモデルに接し、社会活動を体験する」、2年生「自らがよき市民となり社会活動を創り出す」、3年生「社会の一員として企業の営利活動に挑戦する」という系統性をもって組み立てられている。

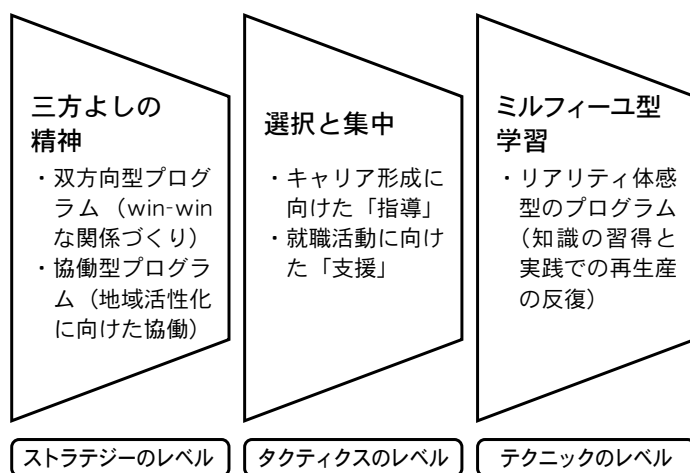


図4 CLCPの実践に向けた組み立ての構造図

それぞれのプログラムは、すべて次の段階の導入として機能しており、例えば、1年生の市民活動体験は2年生で取り組む学生バーチャルカンパニー・HSJ企画の幹部の養成や社員としての資質開拓を兼ねている。また、2年生のイベント開催や会社経営は、3年生で企業の営利活動にチャレンジするためのトレーニングの場となっており、3年生での活動は円滑な就職活動への布石として機能する。

CLCPにおける「指導」は、カリキュラムに設定されたキャリア教育科目を通じて行われ、1～2年生は必修、3年生は選択科目となっている。以下、CLCPの中核である「指導」について2年間の実践報告を記すこととする。

4-2 1年生「市民活動体験」

1年生は、地域のNPO法人や市民団体の活動を教材とし、「市民のロールモデルに接し、社会活動を体験する」ことをテーマとして実施した。学生たちのミッションは、1年間をかけて、豊かな地域を創造するため非営利活動に汗を流す大人たち、いわば市民のロールモデルと交流し、そのお手伝いをすることにある。

NPO法人や市民団体の活動を1年生の教材に選んだ理由については、以下のような理由によりCLCPの導入として1年次の教材に最適と判断したためである。

- ①市民活動が慢性的な人手不足に悩まされていること
- ②活動自体に教育との親和性が高いこと
- ③教育的視点をもったスタッフが多いこと
- ④非営利の活動であるため受け入れ先の負うリスクが少ないこと
- ⑤市民活動の推進者には会社の役員経験者など職業経験の豊富な人が多いこと

12月には学習のまとめとして、地域の大手商業施設2階のホールにおいて、「学生が見た・聞いた・感じた・町づくりにホンキな大人たち」と銘打った市民活動体験報告会を公開で行った。自分達がお世話になった団体の素晴らしい活動を一般市民にも知ってもらおうという趣旨で平成22・23年度とも実施した。活動の場を提供していただいた団体のスタッフにも協力いただき、一般の方を含めて100名余りの人数で開催できた。

これらの活動を通して学生は、大人たちから得られる期待や感謝と引き換えに自己効力感を向上させ、コミュニケーション力などの社会適応力を手に入れる。同時に、他者のために汗を流し感謝されるという行為が、労働の最も原初の形であり基盤であることを学ぶとともに、それが人としての喜びや自己実現に深くコミットしていることに気付くことも学習の意図には含まれている。学生の学びの場を提供していただく市民活動団体は、平成22年度10団体であったが平成23年度には15団体に増加するなど、CLC ネットワークは着実な広がりを見せつつある。

4-3 2年生「学びのフリーマーケット・聖泉 CLC セミナー」

2年生は、CLCPで最も華やかな活動が繰り広げられる。1年生における経験を糧にしながら「自らがよき市民となり社会活動を創り出す」ことをテーマにして学習が展開され、学生が主体的によき市民の仲間入りを果たすことをねらいとしている。

具体的には、学生がHSJ企画というバーチャルカンパニーを結成し（図5）、学びのフリーマーケットと称した大イベント「聖泉 CLC セミナー」を企画・開催する。学生たちのミッションは、地元の人を中心にセミナーの講師を依頼し、地域のお年寄りから子どもまでが「楽しみとしての学び」に出会う機会をつくりだすことにある。講座の企画、講師の依頼、セミナーの広報活動、各講座の集客活動、講師との打合せ、講座や会場の準備、当日の運営などが学生（HSJ企画）の手に委ねられ、その活動はテレビや新聞ラジオなどにも盛んに取り上げられた。

平成22年度第1回聖泉 CLC セミナーは「平成生まれの挑戦、地域に喜びと感動を」をスローガンとし、50講座・1,500人以上の集客を目標として設定した。先行する例がない状態でのスタートであったため、イベントのイメージを実感できず、学生たちは作業工程や職務内容の把握に悪戦苦闘した。特に、幹部社員となった学生たちは、自分の職責に加え、他の学生のモチベーション維持に苦労するなど管理職の苦労の一端を垣間見る経験をした。最終的には2日間で55講座、延べ1,502人の参加者を集めることができ、学生ともども涙を流しながら感動のフィナーレを迎えることができた。講座のプロデュースやそのための講師交渉など鮮烈な学習体験を通して、コミュニケーション力はマナーとセットで向上することや、仕事というものが常に相手を想定し

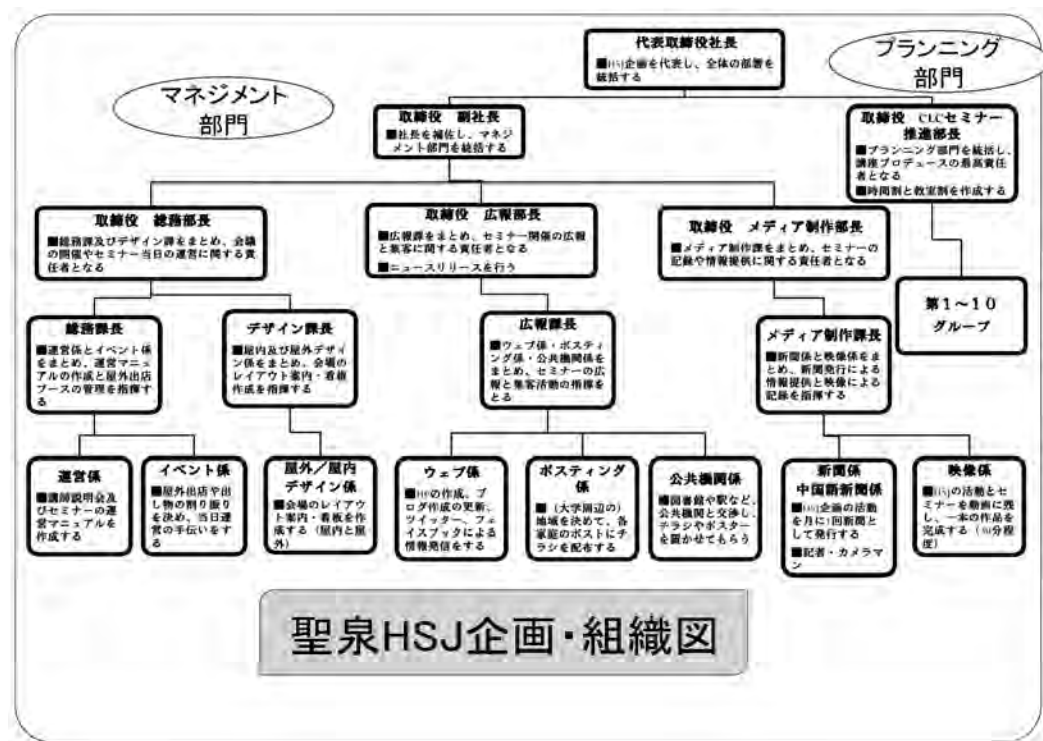


図5 学生バーチャルカンパニー「HEJ 企画」組織図

表2 初年度に実施・計画したプログラム

名称	対象者	内容	ねらい
いいね運動 (学生発案)	参加者	あらかじめ配布された「いいね」シールを、参加者が笑顔や対応のよかった学生スタッフのIDカードに貼ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学生スタッフのモチベーションアップ ・学生と一般参加者との会話や交流の促進 ・市民の参加者意識の触発
椎木・片山プロジェクト (学生発案)	講師 参加者	学内のトイレ・通路・教室などいたるところに、学生が作成した心のこもった一言メッセージを飾りつける。	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の先生及び参加者への謝意と歓迎 ・セミナーのテーマを表現 ・温かみで心の和む空間づくり
スマイルプロジェクト (学生発案)	参加者	参加者が中庭でSMILEの人文字をつくり、4階から撮影する。写真は後日、記念のカレンダーとして贈呈する。	<ul style="list-style-type: none"> ・セミナーのテーマを表現 ・参加記念 ・イベントへの主体的参加による参加者意識の向上
講師認定証 (有山発案)	講師	講座を開いていただいた講師の先生に、フォトフレームに入れた講師認定証を贈呈する。	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の先生への感謝 ・参加記念 ・次年度に向けたステークホルダーの獲得
通訳ボランティア (学生発案)	外国人 参加者	中国人留學生が希望する外国人に対し通訳ボランティアを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人参加者への支援 ・留學生の主体的参加

た相対的活動であることに気付けたこと、組織（会社）というもののリアルな実感をもてたことなど、様々な学習成果を上げることができたほか、成し遂げたという達成感が得られたり、同じミッションを遂行するなかで仲間意識や集団凝集性が高まったりするなどの波及効果も見られた（2010、有山ほか）。

平成23年度第2回聖泉 CLC セミナーは、震災復興を意識したスローガン「あなたに届けます、夢と笑顔」のもとに、初回を上回る60講座・延べ2,000人以上の集客を目指した。2年目については、初年度の取組みのイメージをもって取り組むことができたため、学生のモチベーション維持や準備作業は比較的容易であった。週に1度ずつ部長以上が参集する取締役会、課長以上が出席する戦略本部会議を開いたうえで授業が行われた。結果的には73講座開講・延べ2,536人参加という大成功を収めることができたが、第2回は認知度の向上と規模の拡大もさることながら、学生が発案した取組み（表2）に様々な工夫が見られセミナーの質が高まった。取組みはいずれも大好評となり、市民の中に多くの聖泉 CLC セミナーの支持者が生まれたことと思われる。

4-4 3年生「企業チャレンジプログラムと社長との合同研修会」

就職活動を目前に控えた3年生に対し、よき市民としての資質を身に付けたいという企業での仕事に目を向けていくプログラムが、前期と後期は別メニューで準備されている。前期はチャレンジプログラムと称して、地域の企業や店の課題解決に学生が取組むこととなる。平成22年度は、旅館やスーパー、学校、NPO など約10ヶ所に協力をお願いし、その結果、学生の提案を経営改善に取り入れるなど成果もあったが、学生や受け入れ側の姿勢によってその成果に大きな差が出る傾向にあった。そのため、平成23年度は事業所をひとつに絞り、地域の寿司店と連携してその売上アップに取り組むこととした。このプログラムは学生たちによって「SK（寿司食いねえ）プロジェクト」と名付けられ、フェイスブックなどのツールも取り入れて大変盛り上がりを見せた。寿司店の2階での授業や経営者が参加するプレゼン大会など臨場感と当事者意識を重視した学習を展開した結果、他大学からの参加者があったり受講者を母体とした課外の社会活動グループが誕生したりするなど、当初のねらい以上の波及効果をあげることができた。

後期は、滋賀県中小企業家同友会（県下中小企業約600社が参加）と連携した学習を行う。具体的には、同会の主催する経営者の合同研修会において集団討論に加わり、それをもとにした学内での討論や発表、レポート作成などを実施する。名刺交換から始まる研修会は、学生にとって新鮮そのものであり、社会の最前線で活躍する企業人への興味・関心と緊張感が交錯する充実した学習が展開されている。平成22年度の最大のイベントは、「社長とぶっ続け8時間討論」と名付けられたもので、滋賀県中小企業家同友会の行事である経営研究集会に重ねた取組みを行った。学生は補助員として準備片づけに奔走するとともに、県下数百人の社長とともにマラソン研修に臨んだ。

本学習のねらいは、就職活動を目前に控えた学生に対して、社会人としての逞しきマナー、コミュニケーション能力を習得させることではなく、研修ごとに設定される学習内容を深める

ことでもない。学習効果としてそれらを期待し、十分にそれに応える学習を展開できていると思われるが、そのことをもって学習が完遂できたとは考えていない。この学習の真のねらいは地域を支える経営者の見識や気概に触れ、地元中小企業で活躍する醍醐味とその意義を理解した人材を育成することにある。この点において、滋賀県中小企業家同友会とは CLCP の理念を踏まえた win - win の関係を構築できている。

5 まとめ

文部科学省の学生支援推進事業の委託が本年度で終了する。CLCP も試行の 1 年間を経て 2 年目の取り組みが終わろうとしているが、学習プログラムとしてはスタートしたばかりであり、次年度には新たな CLCP の取組みも構想中である。CLCP の展開という地方の小さな大学の教育改革が、「地域に夢を与える大学」として滋賀の未来や希望の創造に少しでも役に立つならば、しかもそれが、本当に本学のような大学でしかできないことであるならば、地方の小さな大学も捨てたものではない。乱立する小大学に対して不要論や切り捨て論がかまびすしいが、それに対して胸を張って対抗できるかもしれない可能性を実感するところである。

最後に、本稿においては定量的に把握した成果については報告すべき材料をもたないが、観察や聞き取りによる定性的な実態把握を列挙し、CLCP の実践報告を終了したい。

（１）学生の行動の変化

授業終了後にも引き続いて市民活動に取り組む学生が現れたり、自分たちで地域活動をつくりだす学生が多数現れたりするなど、これまで本学に見られない活発な学内の様相が見られるようになった。平成23年度に学生が結成した社会活動グループは5つに及ぶ。

（２）学生の仲間意識の変化

学びのフリーマーケットを経験する 2 年次を中心に、同じミッションをやり遂げた同志的な連帯感が生まれていることが学生の言動や行動から容易に推測できる。

（３）地域との信頼関係と期待の変化

CLCP をきっかけとして、地域の団体や個人と活動する学生グループが飛躍的に増えるとともに、地域の中小企業や市民団体からの協力依頼がひきもきらない状況である。町で活躍する NPO や市民団体との良好な関係が築けるようになり、CLC ネットワークに参加していただいている団体・個人数は、平成21年度の27から平成23年度は延べ約120を超えるまでに増加した。本学もこの地域の未来にコミットしているという実感は、私達にとって何にも代えがたい労働へのモチベーションとなっている。

（４）CLCP への注目度の変化

CLCP が先進的なキャリア教育の取組みとして全国的な認知を受けつつあり、新聞やテレビ・ラジオ・雑誌などにとりあげられた回数は平成22年度以降延べ30回を超え、全国の大学・企業からの視察や講演依頼も平成22年度以降10数回を数える。

引用文献

- 有山篤利・出路幸子・富川拓・柴田雅美・富章・西村泰昭（2010） CLCP によるキャリア教育
科目の学習成果に関する検討. 聖泉論叢18
- 中央教育審議会（2011） 今後の学校におけるキャリア教育, 職業教育の在り方について（答申）
- 石田秀朗（2010） 価値創造という視点から考える大学生のキャリア教育論. 奈良文化
- 川崎知恵（2011） ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成.
キャリア教育研究29
- 経済産業省（2007） 「社会人基礎力」育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目標して～
- 菊池武彪（2008） キャリア教育概説. キャリア教育学会編. 東洋館出版社. 東京女子短期大学
紀要41
- 文部科学省（2009） 平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」の公募について.
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp/1260843.htm
- 内田樹（2008） 一人では生きられないのも芸のうち. 文藝春秋社
- 梅澤正（2007） 大学におけるキャリア教育のこれから. 学文社. 東京
- 渡部三枝子（2005） 大学における「キャリア教育」の意味を考える. 文部科学教育通信118

参考文献

- 有山篤利（2011） 地域とともに 地域力循環型キャリア教育の試み. 文部科学時報1626
- 有山篤利（2011） 地域とともに～地域力循環型キャリア教育の取組み～. 大学マネジメント73
- Between 編集部（2011） マーケティング3.0時代の大学の新しいステージ：「地域のため」の人
材育成で大学の存在価値の向上を図る. Between. 進研アド